夢の通ひ路

「……は？」

すっかり日の暮れきった午後十時、泊りがけの仕事から帰ってきた源信は、普段の平静さからはとても考えられないほど間抜けな声を漏らした。口にくわえていた煙草も危うく落ちるところであった。それもそのはずであろう、何せ自宅――家賃二万七千円の安アパート――のドアの前に、死にかけた赤ん坊が転がっていたのだから。

階段を上がってきた源信の足元、真冬の嵐が吹き荒ぶ中、薄い布に包まれた赤ん坊が、弱々しい泣き声を上げていた。それを見下ろし、硬直したまま、源信はまた、「は？」と頭の上にクエスチョンマークを浮かべた。あらゆる思考が完全にストップしているのを、源信は自覚する。どうしよう、どうすべきか、どうにかしてください。誰かに頼ることなど皆無に等しい源信が、どこにもいない誰かに縋っていた。そんな源信の前で、彼の疑問符に反応したのか、赤ん坊が、寒さで真っ赤になった指を動かした。いやそんな助けを求めるような仕草をされても困るのだ。源信はもう、雪でべしょべしょになった靴も気にならなくなるほど混乱していた――浮橋源信二十五歳、生まれて初めての混乱であった。

源信はとりあえず濡れた傘を通路の柵にひっかけ、両手で顔を覆った。今現在この状況を考察するにあたって、何が最大の問題かと言えば、心当たりがまったくないことであった。源信も二十五であるし、女とそう言う関係になったことがないと言えば嘘になるのだが、相手を妊娠させるような行動は取ったことがない。いや確かに、避妊していても妊娠する可能性はゼロではないのだが、だからと言って、まさか金髪で白い肌の赤ん坊が源信から生まれるとはとても思えない。というかそもそも、パツキンのネエちゃんと致したことは十八の頃と二十二の頃の二回だけであって、その二回で子供が生まれたのならこんなに小さいはずがない。ドアの前に転がった赤ん坊はどう見ても生後一年も経っていない。時期が合わない。他の女は大体有色人種であるし、つまりこの赤ん坊は源信の子供ではない。そう、源信の子供であるはずがないのだ。

よし。源信は手の中から顔を上げる。そして、出した結論を噛みしめると、赤ん坊を放っておくことにした。赤ん坊が凍死しようが源信には関係のないことだ――祟るなら、ちゃんと俺じゃなくて捨てた親を祟るんだぞ。

源信は赤ん坊を包む布を引っ掴むと、隣の家のドアの前にそっと置いた。かれこれ軽く半年以上は隣人の存在は確認できていないし、ポストには新聞が大量に詰まっていて、夏頃は異臭がしていたような気がするけれども、源信の責任にならなければそれでいい。面倒なことはごめんだった、それでなくとも面倒な仕事であるのに。

急に思い出された爪先の痛みに顔をしかめながら、源信はドアの鍵を開けて家に入る。古ぼけた畳の敷かれた六畳一間の安い部屋は、それでも彼の城だった。もっとも、普段から何もない彼の家は、一週間開けていたことでますます廃屋のような匂いを放っていたが。

……流石に、何か潤いが欲しいか。

源信はサボテンでも買ってこようかなと思いながら電気ストーブの電源を点け、鞄とコートを放り投げると、くわえていた煙草をビールの空き缶で消してから万年床の布団に転がった。次に出るのは、三日後だ。上司が言うに、今回の仕事が終わったら、少し昇進できるらしい――とは言え、正直、どうでもいいことだった。源信には恋人もいないし、趣味もないし、家族もいない。守るべきものは何もない。だから、こうして昇進して得られる金が増えようが、危険が増そうが、どうだっていいのだ。汚い仕事で何の問題がある？　六畳しかない部屋だって、源信には十分すぎるほど広い。

張り合いのない人生だと人は言うだろう。しかし、源信の人生はこれで、これ以外を彼は知らない。

源信は孤児だ。三歳の頃にはもう孤児院にいた。生まれたばかりの源信は、ロッカーに捨てられていたのだそうだ。だから源信は、生みの親のことを知らない。名前も、孤児院でつけられたものだ。そして四歳の時、彼は小さな会社の夫婦に引き取られた。引き取ってくれたその家は、源信をアクセサリーか何かのように扱った。『優しい自分たち』を周りへアピールするため、彼らには源信が必要だったのだ。それでも、飯を食わせてくれたことに関して、源信は彼らを怨んではいない――怨むとすれば、商売で大損を掴まされた挙句金に困った彼らが、どこかへ逃げるためだけに源信をこの入江地区へ捨てて行ったことだ。あの時、源信は六歳だった。

……ああ、嫌なことを思い出したな。

早く忘れてしまおう。源信は寝返りを打って横向きになると、積んでいた雑誌を一冊取った。なぜ買ったのかまるで思い出せない漫画雑誌は、よく見れば去年のものだった。だからと言って読むのを止めるのもまた億劫で、源信はぺらぺらとめくってみた。少年漫画らしい簡略化された絵もあれば、驚くほど緻密に描き込まれた絵もある。だが一貫して、この様々な絵で描かれた漫画の中では、人がよく死んだ――それこそ、紙切れか何かのように。

いや、きっと紙切れの方がまだ人よりも重い。金もまた紙切れの一種だが、人よりもずっとずっと重いものだ。少なくとも、源信や、源信の属する類の人種よりは。

溜息を吐いて、源信は雑誌を閉じた。疲れているんだ、俺は。携帯電話をズボンのポケットから取り出して充電器に繋ぎ、源信は枕と羽毛布団を引き寄せた。丁度良く部屋も温まってきたし、このまま寝てしまおう。それが一番いい。無性に酒を飲みたかったが、仕事へ行く前に飲み切ってしまっていたので、それは叶わなかった。

――張り合いのない人生。

しばらく布団の中で動かずにいた源信は、そんな言葉を思い浮かべてからむくりと起き上がった。やはり、ビールでも買って来なければ。とてもじゃないが、眠れない。

放り投げた鞄の中からよれた二つ折りの革財布を取り出し、源信は充電途中の携帯を引っこ抜いてズボンのポケットにねじ込んだ。それから壁にひっかけておいたダウンのジャケットを着こんで、煙草とライターを確認してから、源信は家のドアを開けた。

赤ん坊はもう泣いていなかった。ああ、ついに死んだか。源信は煙草に火を点けて、ナンマイダ、と適当な念仏を唱えてやる。死体は上司にやろうか。きっとあの人は喜ぶ

だろう、何せ彼は屍体性愛だから。ペドかどうかは知らないが。剥製にでもしてくれるかもしれん。貸しを作るのはいいんじゃないか……

そんなことを考える源信が柵にひっかけておいた傘を取るのと、赤ん坊が大音声で泣き叫び始めるのはほぼ同時であった。

「――――ッッ!?」

火が点いたように泣き始めた赤ん坊の声に、源信は思わず耳を押さえた。手から滑り落ちた傘が公共廊下に落ちる。自転車に乗った、バイト帰りらしい通りすがりが、驚いてこちらを見ながら走って行った。隣のアパートでは、何事か確かめようと窓を開ける音がいくつも聞こえた。これはまずい。

源信は半ばパニックになりながら手荒い所作で泣き叫ぶ赤ん坊を抱きかかえると、家の鍵を開けて飛び込んだ。途端、ぴたりと赤ん坊の泣き声が止む。

（こ、このクソガキぃ……!!）

叩きつけて殺してやろうかと一瞬本気で考えつつ、それを実行するのもいまいちはばかられて、源信は重たい吐息を漏らしながら玄関にへたり込んだ。どうすればいいんだ、これ。どうせ外に出せばまた泣くだろう。警察はまずい。警察に行けない以上、役所に行くのも些か難しい。疲れ果てながら、源信はポケットから携帯電話を取り出し、アドレス帳を開いた。この局面はどう考えても自分一人では打開できない。どうにか誰かに押し付けねば。昔の女で子供が好きな奴や欲しがっている奴が一人くらいはいるだろう。

そうして源信は、全力でアドレス帳の電話番号に電話をかけ始めたのだった。

◆

結果から言えば、見つかった。引き取るというわけではなく、育児の協力と言うことだったが、それでもいないよりはマシだ。源信が引いた最低ラインの妥協点である。

だが――

「なんでお前しかいなかったんだ……」

「あらやだ。別にいいじゃないの」

源信は部屋に呼んだその男――いや、女を前に何度目かわからない溜息を吐いた。赤ん坊を抱いたその女は、ドピンクに染め上げたポニーテールをふさふさと揺らしながらウインクをして、「私がいなかったら大変だったんでしょ？」と悪戯っぽく笑った。

「うるさい、このオカマ。お前なんかに手伝ってもらうなんて不安で仕方ないよ、俺は」

「ニューハーフって呼んでよ！　ていうかどーゆー意味よ！　一応これでも前は保父さんしてたんだからねっ！」

パッドを入れた胸をバンと張って、女は得意げに鼻を上向かせる。だめだ、やっぱり信用ならん。この女に連絡を入れたのは間違いだった、と源信は頭を抱えた。宿木宮彦、もとい宿木都、三十二歳。三度の飯よりアロマや香水が好きな変人である。よく飢えて干からびている女だ。いったいなぜこれと一時でも友人だったのか理解に苦しむところであった。もっとも、彼女に言わせれば今でも友達なのだろうが。

「じゃあミヤ、お前はこの赤ん坊をとりあえずどうすればいいと思うんだ？」

「そうねえ……」
都は、問われてしばらく考え込む様子を見せた。
これは多少なりとも期待していいのだろうか、と源信が僅かに思った瞬間、都は晴れやかな笑顔で人差し指を立てた。まるで名案を閃いたとでも言うように。
「名前をつけましょう！」
とりあえず源信は、横にあった雑誌を掴むと、無言で都の頭を叩いてやった。
「いたあ⁉　今なんで殴ったのゲンちゃん⁉」
「次ゲンちゃん言ったらその髪の毛を全部バリカンで刈るぞ。……もっと実用的なことを言えんのか、お前は。何か、こう、役所や、そう言うものが出てくることを俺は期待していたんだけどな」
「そんなの私たちじゃお世話になれるわけないじゃないっ。それにそう言うのはそっちの方が得意でしょ？　あんたんとこの上司に頼んで適当に戸籍作ってもらいなさいよっ」
唇を尖らせて都が言う。上司に頼んで戸籍を偽造。源信は、思い切り血の気が引いた。人生で借りを作りたくないベストスリーがいるとしたら、それは都と、中国にいた頃の友人、それからあの上司たる男である。屍体性愛の。
「お前……あれに借りを……作れと……」貸しなら積極的に作りたいが借りは死んでも作りたくない。「仲間を作りたくて必死なあの男に？」
「いくら変態でも仕事が出来るならいいじゃないのよーっ。うちなんて大変なんだから、人のナニを潰すのが趣味なのよ？　しかも仕事できないし……羨ましいくらいよ！」
「……お前は……目の前で……水死体を……いやもういい。あまり思い出したくない」
ぷりぷりと頬を膨らませる都に反論しようとした源信は、鮮明に思い出されかけた当時の光景に、そっと蓋をした。スナッフビデオも作ったことがあるし、奇形女を好事家に斡旋したこともあるが、目の前で水死体を犯す顔見知り程吐き気を催すものではないと源信はあの時知った。水を吸ってガスが溜まってぐしゃぐしゃになった死体のどこが性欲の対象になるというのか、それはあの男しかきっと知らない。いや、知らないでいて欲しい。あんなのが世の中のマジョリティなら源信は死を選びたい。
「水死体をなんなのよ？」
「思い出させないでくれ、お願いだから」
蓋の隙間から漏れ出て来ようとする記憶を必死で押し込めながら、源信は買ってきてもらったビールをあおった。正直、電話口でドライ以外と言ったのにピンポイントでドライを買ってきた都にシェイクしたビールをかけたくて仕方がなかったのだが、赤ん坊を抱いてくれている以上、それはやめておいた。おむつを替えてくれたのも都である。
「どうしましょうね？」
「それを聞くために呼んだんだがな……」
くそ、なんで誰も子供は要らないって言うんだ。源信は頭の中で、最早何度目かわからない悪態をついた。どういうことだ。子供が欲しいからとゴムに針で穴開けた馬鹿女にまで電話をかけたのにも関わらず全員から断られるとは思いもしなかった。因みに馬鹿女曰く、「あんたの子供なら欲しいけど知らない子供なんて要らない」。子供ならなんでも一緒だろうがと源信は叫んで電話を切った。赤ん坊が泣いたのは言うまでもない。

畜生泣きたいのは俺だよ。
「じゃあやっぱり名前を考えましょうよ」
「結局そこに行き着くのか……」
源信はうんざりしながら都の腕に抱かれて眠る赤ん坊を見た。誰だか知らないが、とんでもないものを押しつけやがって、と源信は見も知らぬ男女を憎々しく思った。大体なぜ俺だ。留守だから丁度良いとでも思ったのか？　それとも他の理由があるのか。そもそもなぜ入江地区に捨てて行った？　こんな真冬の嵐の日に。完全に殺す気だったとしか思えない。こんな安アパートの前に捨てておけば、誰かに罪を押し付けられるとでも考えたのだろうか。それともただ単に邪魔だっただけなのか？　邪魔だったから、目に付いた場所に捨てたのか。ならばなぜ産んだ？　産む前に堕ろしておけば、邪魔にもならず、適当な場所で適当なものに加工されてむしろ人の役に立っただろうに。少なくとも、今こうやって源信が頭を悩ませる必要などどこにもなかっただろう。
そうだ――捨てるくらいなら、なぜ産んだんだ。なぜ拾ったりしたんだ。
源信は無意識のうちに、奥歯を軋らせていた。
「――人の名前をつけるのって結構難しいわねえ。ゲンちゃんなんか思いついた？」
都が能天気な声で問いかけてきて、源信はハッとする。どうだっていいことじゃないか――どうせ、考えたって、自分の産みの親は出て来やしないし、おそらくこの赤ん坊の親も出て来ない。赤ん坊が、不意に目を覚ました。真っ青な、海にも似た瞳が見えた。申し訳程度に生えた金髪を、都がいじる。この小さい生物は、これからどうやって生きていくつもりなんだろう？　源信はそんなことを考えた。捨てられたこの子は。手がかりなど何もなかった。布は安物で、手芸店に行けば売っているようなものだった。
そう言えば、この赤ん坊は、源信が傘を掴んだ途端に泣き出して、家に入った途端泣き止んだ。それがこの赤ん坊の生き延びる方法だったのかもしれない、と彼は思った。生き延びるために必死だった――六歳の時の源信も。
警察は当てにならなかった。役所は警察に通報するだけだった。親はとっくの昔に逃げていなくなっていた。親を怨まない日はなかった。どちらの親も、親足りえなかった。子供を人間として見てなどいなかった。復讐してやりたいと、あのクズどもをどうにかしてやりたいと、ずっと心の奥底では思っていた。
それならば、と源信は思う。赤ん坊が彼に手を伸ばした。その手は、この場所へ辿り着いた六歳の自分の姿とよく似ていた。
捨てられた子供。愛されなかった子供。生きるために手を伸ばす子供。
源信は静かに、ビールの缶を畳へ置く。
これは、善行なんかじゃない。偽善ですらない。単なる、源信のエゴだ。復讐に過ぎないのだ――己の両親たちに対する。
「……そうだな、夢、なんてのはどうだ？」
この赤ん坊を、誰よりも愛して、育てきってやろう。
俺がいるようなこの汚い場所に落とさず、普通に育ててやる。
誰よりも幸せにしてやろう。
それが、俺の復讐だ。

源信は手を伸ばす赤ん坊の手に指を握らせる。赤ん坊の小さな手は、先程より幾分温かくなっていた――生命の温度だ、と彼は思った。そして彼は、赤ん坊の手を優しくほどくと、「なんか普通過ぎない？」とぼざく都のためにバリカンを取りに行ったのだった。

《了》

――二十年後、彼は己の生を諦めることとなる。
（それでもお前は生きなさい、俺の自慢の娘）